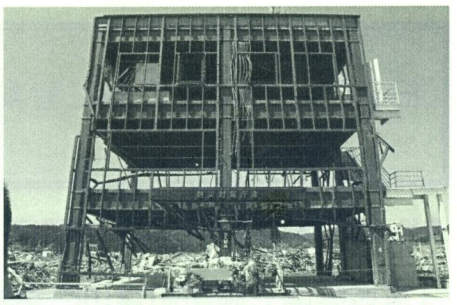
（前ページから続く）ここにあったものはすべて流されてしまった。建物が新しかろうが古かろうが、大きかろうが小さかろうが、老人だろうが子供だろうが、何の区別も無かったのだ。目の前に広がっている光景が、僕らに命を与えてくれる見えない力は、同じようにいとも簡単に命を奪うのだということを、僕に初めて、そしてはっきりと教えていた。



目の前の全てが、永遠に失われてしまっている。世界中で、ネットや新聞やビデオで繰り返し見られた光景を、ここで繰り返して述べるつもりはない。しかし、テレビでは死というものの匂いを感じることは決して出来ない。この絶望の、非現実的な沈黙を聞くことはできない。

全ての希望を失って、失われた親兄弟の記憶を深く深く掘り起こしながら、ただ黙って、朽ち果て丸裸になった故郷を見つめる祖父母たち、父母たちの呆然とした表情を味わうことはできない。今はただ、僕らの口の中も心の中も、沈黙が支配するだけで、何の声をかけることもできない。僕には何の希望も見出せず、一体この土地はどうやって再び立ち上がることが出来るというのか、この何もないところから、一体誰が起き上がるのか、という思いを抱くばかりだった。

（志津川高校体育館での単独リハーサル）

そしてその問に対する答えは、思いのほかすぐに、しかも大きな喜びと驚きをもってもたらされた。到着すると、僕たちは単独リハーサル、そして学校バンドの生徒たちとの合同練習を行い、ホテルに移動してコンサートを行った。敬いに満ちた厳かな雰囲気の中、大きな部屋で演奏をした。この場所は普段は人々が食事をする場所で、豪華な装飾があったり、大切な置物が置かれていたりする。1年前だったら、ここにいる人々はきっとこの美しいホテルの、海を臨む眺望の良い部屋でのコンサートを心から楽しんだことだろう。しかし今は、そのように感じられる人はここにはいない。こんな贅沢はすぐにでも投げ捨てて、一刻も早く自分の家に戻りたいと皆が思っている。しかし、そんな複雑な思いを抱く人々の前で、僕たちは演奏した。できることなら、ほんのわずかな時間でも、彼らの心に新鮮な空気が流れるように、そして出来る限り丁重に、人々に対して無礼に見えないように。そして人々は、日本人らしく威厳と礼儀正しさをもって、僕たちを扱い、感謝してくれた。

（高校生との合同リハーサル）

この中学校と高校は、この町の別々の丘の上にそれぞれ建っており、丁度その間に町が広がっていた。学校からは、丘に囲まれた美しい湾が見渡せた。3月11日の14：46、生徒たちはここで練習をしていて、皆無事だった。ここにこそ希望の光があったのだ。

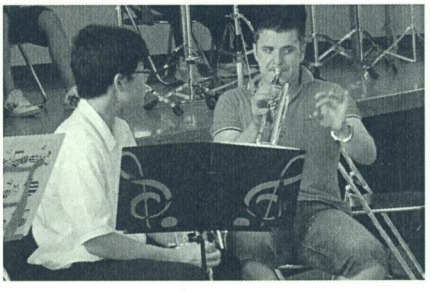
（避難所「ホテル観洋」での単独コンサート）

地震の直後、すぐに動ける人々は皆、この学校のある丘に避難した。そして津波が押し寄せ、彼らの町を打ち消してしまう様を、ここから眺めたのだ。子供たちの中には、ほとんどの家族をこのときに失ったものも多い。他に行き場がないため、数週間この学校で過ごしたという。しかも少なくとも1週間は電気も水もなく、食物も充分にはなかった。

それなのに、わずか4ヵ月後には、彼らは皆揃ってきれいな制服を着て、きっちりと折ったリボンを身につけ、礼儀正しく美しいマナーを見せて、他の多くの日本人と同様に、僕を感心させている。教師の言うことに真剣に耳を傾け、黙ってきっちりと演奏する。まるでジャングルの中のアラビア市場のようなリハーサルばかり聴いてきた僕は、いつもこの日本人の礼儀正しさに驚かされるが、今回もそれは同じで、まるで何事もなかったかのように、日本のほかの地方の普通の学校の様子を見ているのと変わりない。

（志津川中学校での合同リハーサル）

東京からプロの演奏者が学校に来ることに皆ワクワクして、楽器をピカピカに磨いて学校へ持って行き、その日が終わって家に帰れば、



大喜びで、撮った写真をブログにupしたり、家族や友達に見せたりし、そしてもしかしたら音楽の勉強を続けてプロの演奏者を目指そうと思う子供もいるかもしれない。コンクールの課題曲をもっと上手に演奏するにはどうしたら良いかという質問を受けた。もちろん、うまく演奏することは大切で、その気持ちはよくわかる。皆が一生懸命で、指揮者が棒を持ち上げたら、誇り高く楽器を持ち上げる。

（次ページ右上へ続く）